

## 【海外学会報告】

2018 年度 第 20 回韓国ケベック学会 参加報告  
20<sup>e</sup> colloque de l'ACEQ (Association Coréenne d'Études  
Québécoises)  
Le dimanche 18 novembre 2018, Ambassade de France en  
Corée du Sud

2018 年 11 月 18 日に開催された 20<sup>e</sup>me Colloque de l'ACEQ に登壇者として参加して参りました。今回、この会に参加する機会を与えて下さった AJEQ と ACEQ に心からお礼を申し上げます。滞在期間は、わずか 2 泊 3 日でしたが、ACEQ の先生方との交流を通して、ACEQ と AJEQ の小畑先生、立花先生、小倉先生をはじめ先生方がこれまで築いてこられた関係の深さを実感しました。また、ケベック、韓国、日本という三つの地域が出会い、研究を深めていくことのできる「ケベック研究」の面白さを再確認しました。貴重な機会を与えて下さり、ありがとうございました。

当日の内容を簡単に紹介します。2018 年は、Québec, 50 ans après Mai 68 というテーマが掲げられていました。まず、このテーマで、招待講演者の Marie-Andrée Bergeron 先生（カルガリー大学）が Les suites de 1968 au Québec : entre les espérances et la résignation というタイトルで発表されました。主な内容は、1960 年代におけるフェミニスト雑誌から、今日のフェミニスト・ブログまでのフェミニズム言説の変遷の分析です。50 年を通して、フェミニストたちは、メディアという市場評価の介入が不可避な場において、メインストリームのリベラル派と、よりラディカルなアクティヴィストという異なるベクトルのフェミニズムを生み出します。発表では、この緊張関係自体が、フェミニズムの運動／思想にダイナミズムを与え続けていると述べられました。さらに、今日のインターネット・メディアを用いたフェミニズムは、これまでのフェミニズムと断絶しているのではなく、むしろ「運動の知的かつ文学的歴史にそのルーツ」を見出し得ることが強調されました。この発表を通して、私は、フェミニズムとは、女性たち自身が、家父長制的システムを変革していくために、様々な制限がありながらも、その中で最善の条件を作り出していく中で深化してきたことを再認識しました。同時に、その深化の

プロセスには、自らの闘いのあり方への反復的な省察が不可欠であり、そしてこの自らの行為への省察の行為にこそ、フェミニズムの知が生み出される契機があるのではないかと思います。また、偶然にも、BERGERON 先生と、その後続く私の発表は、女性たちの運動というテーマ、またフェミニズムへの関心という共通点があり、この偶然と出会いに感動しました。

私の発表は、*L'artisanat des femmes autochtones en tant que sujet d'histoire*（「歴史の創造主体としての先住民女性たちの手仕事」）というタイトルで行いました。実は、私としては、このテーマで発表すると決めてから悩むことがありました。それは、韓国で日本人の私が「カナダの先住民の女性たち」の問題を取り上げるとはどういうことか、日本が朝鮮半島の方たちに対して行ってきた問題とは無関係の顔をして、このテーマを発表して良いのだろうか、ということでした。そこで、今回、先住民女性たちの手仕事を捉える枠組みを支える一つの柱として、2015年に発表された「インディアン寄宿学校問題」に関する最終報告書における寄宿学校問題を「文化的ジェノサイド」として捉え、先住民の人々の癒しを最優先事項としつつ、非先住民のカナダ人が、先住民の人々の経験から学ぶ姿勢なしに「和解」の扉は開かれたいとする方針を採用することとしました。それにより、カナダにおける先住民女性たちの問題を考えることを通して、日本人のフェミニストの研究者である私自身の問題として、日本が抱える朝鮮半島との関係の問題、アイヌ問題、沖縄問題を考えていくための実践的方途を得る機会と位置づけました。

発表の具体的な内容は、ケベック市を中心に活動を展開している、パートナーから暴力を受けた先住民の女性たちと子どものための支援コミュニティ、ミシナク共同ハウス(Maison communautaire de Missinak)の活動に着目し、歴史の創造的主体としての女性たちの尊厳という観点から、手仕事に関わる実践の価値を、ミシナクのコミュニティとしての形成・展開と相互関係的に捉えながら明らかにするというものでした。今日、先住民の女性たちは、先住民であり、かつ女性であるということに由来する抑圧状況を生きています。それにより、女性たちが暴力を受けたり、また、長い間、先住民の人々との大地に根ざした共同体の暮らしの中で培ってきた知も奪われていました。ミシナクは、2000年に始動したプロジェクトであり、先住民の女性たちと非先住民の女性たちや男性たちが、協働的に構築し、こうした先住民女性たちの尊厳の回復の支援を行っています。ミシナクは、その設立当初から、先住民の女性、男性、また非先住民の人々との共同で、先住民の手仕事を行う活動を

行ってきました。発表では、こうしたミシナクの形成・展開プロセスと、ミシナクで行われている手仕事の活動を、実物や写真を通して紹介し、先住民の文化における意味などもあわせて説明しました。そして、ミシナクのプロジェクトを構成する3要素と、ミシナクの展開における手仕事の意味を指摘した上で、手仕事の実践とコミュニティの展開は相互作用的関係をもち、ミシナクの工芸品はコミュニティの生成過程の中で作り出されるのであり、ミシナクの生成と展開は手仕事なしには実現されえないことを述べました。最後に、このようなミシナクの実践は、先住民の女性の尊厳の回復であると同時に、先住民と非先住民の関係を再構築し、新たな歴史を創造していくための和解の実践の一つであると述べました。

以上の私の報告に対して、会場からは Bergeron 先生からご質問をいただきました。先生自身が、フェミニストとしての活動経験があり、いま、大学で授業をされながら、教室の中で、男女平等や、多様性の尊重を実現していきたいと考えているが、どのような実践があるのかということでした。私自身も、大学でフェミニズムや人権教育の授業を担当していて、同様のことを悩みながら実践していたので、とても有り難い質問でした。この質問に対しては、私が出会ったケベックの実践記録を紹介したり、私自身の実践記録を用いた授業の展開と、学生の反応を話しました。

続いて、セッション3では、Park Heui Tae 先生が *La politique du film apolitique – Documentaire de Pierre Perrault et Mai 68* というタイトルで、Pierre Perrault のダイレクト・シネマにおける政治性を明らかにするご発表をされました。10月に行われたケベック学会での杉原賢彦先生のご発表とも重なるところがあり興味深く伺いました。次に、Kim Min Chai 先生が、*La norme linguistique et la politique linguistique au Québec : hier et aujourd’hui* というタイトルで、ケベックのフランス語における英語からの借用語の使用状況に関する報告をされました。

最後に、大会の後、Bergeron 先生と同年代の研究者同士で、お互いのこれまでの実践経験や、そこでの困難などについて、交流することが出来ました。また、Han Yong Taek 先生、Park Heui Tae 先生とは大学教育や多文化主義教育の実践についてお話を伺ったり、私が研究しているモントリオールのフェミニズム・アートのギャラリーで作品展をされたことがある韓国出身のアーティストの方に出会いました。ACEQ の先生方の温かな歓迎と、思いがけない出会いと交流に、とても感動した韓国滞在となりました。今後も、ケベッ

ク研究を通して、様々な人と実践に出会っていきたいです。

(矢内琴江 福井大学)